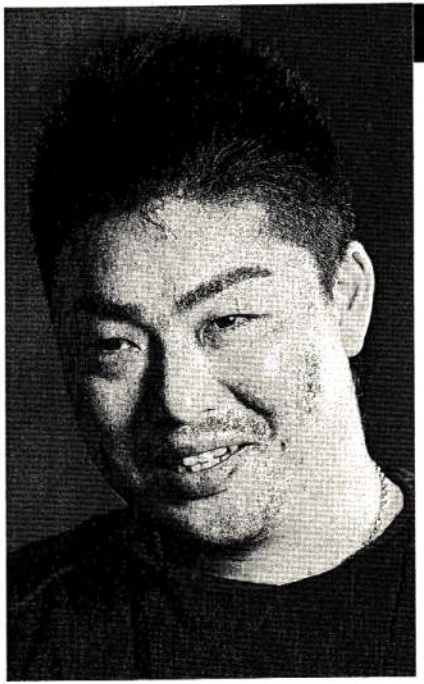
かながわ時流自流 この人が語る

横浜ベイスターズ選手／村田修一さん

男村田の子育て

「子どもの身になって考える」

文＝石橋 学 写真＝木田 亜紀彦



むらた・しゅういち 福岡県篠栗町出身。東福岡高校、日大を経て2003年に横浜ベイスターズ入団。愛称は「男・村田」。1年目で25本塁打を放ち、長男閏哉君が誕生した06年のシーズン途中から4番に座る。07、08年とセ・リーグ本塁打王。08年の北京五輪、09年のワールド・ベースボール・クラシック（WBC）日本代表。09年7月に次男鳳晟（こうせい）君が誕生。29歳。

野球の世界における最高峰の技能集団に属し、本塁打王に輝くこと2度。「ランナーためて、おれに回しゃいいんだよ。何とかすっから」。後輩を引き連れての酒席、テレビカメラが回ればそんなセリフの一つでも吐いてみせる「村田節」が、静かな独白の調子である。

「いまの息子を否定するわけじゃないけど、3千㌘で生まれるのが普通でしょう。本来なら学年は一つ下だし、早生まれにもなった。みんなができることができないと、幼稚園でも泣いているらしい」

わが子の成長に目を細める運動会は、超未熟児として生まれた愛息が、まだ何ができないのかを知らされる場でもあった。

「でもあいつ、『かけっこで1番は無理だけど、2番になるよう頑張る』って。ああ、長い目で見ることが大切だな、と。みながそう思えれば、子育てでイライラして虐待することも減るんじゃないかな」

出生時712㌘。小さい体で何かを伝えるために、この子は生まれてきた。そう思えるようになると、打席に向かう気持ちにも変化が生まれた。その不思議を思う。

■□■

生後1週間余で腸に穴が開き、運び込まれた県立こども医療センターで医師は告げた。「治療を続けるべきか、つらく痛い治療をやめて、よく頑張ったとねぎらうのがいいのか。この子の身になって考えましょう」

恐らくはあった逡巡のとき。「あそこであきらめていたら、いまの閏哉はいない。正しい決断ができて本当によかった」

小さな命を引き受ける覚悟―。それはしかし劇的に芽生えたわけではない。

保育器のなか、小さな手にこわごわ触れたら、指をぎゅっと握り返された。肺が未熟で呼吸が弱々しいから「頑張れ、頑張れ」と念じたら、目の前で数値が上がった。「これは絶対通じているぞ、と」。偶然には違いない。端から見れば取るに足らぬ出来事かもしれない。ただその一つ一つが大事だったのだと思える。

いまも胸に残る「子どもの身になって考える」の一言。思い起こされるまなざしがあった。

故郷福岡の父は、自分が出ていない少年野球の試合にも足を運び、ベンチに向かってビデオを回し続けた。野球の強豪校への進学を認めてくれたのも父だった。よき理解者は、誰より自分のことを見てくれていた。

「食事のときは絶対にテレビをつけない。すると自然と会話が生まれる。『メシ、まずい』でもいい。子どもと話をすることです」

子どもをめぐる悲しいニュースが続く折、受け継がれた村田家「家訓」には説得力があった。

■□■

キャッチボールはまだできない。でもいいじゃないか。子育てなんて、そもそもままならぬものだ。プロ野球選手であってもカッコイイ父親でいられるとは限らない。何しろ10回で7、8回は打ち損じるのが、野球というスポーツなのだ。

「ご飯をいっぱい食べないと、パパみたいにおっきくなれないぞとしかる。すると『じゃあ、なんで三振したの』って。痛いところを突いてくる」

4年を数えた父子の物語。「懸命に生きようとしている息子を見て、打てないことでちまちま悩んでも仕方ないと思った。親としていろんな場面で決断するうち、優柔不断なところもなくなった。野球選手としても成長できた」。ただ打った、勝っただけではない野球人生は、豊かな実人生にもきっとつながっている。

さて、本拠地移転も取りざたされた球団の売却騒動だが、フリーエージェント（FA）権を得たハマの主砲の行方も気掛かりである。「ええ、家族と相談して決めます。あいつ、幼稚園を替わりたくないって言うだろうな」。記者は横浜残留が濃厚、とみている。

◆村田選手の新生児医療支援活動　2006年2月に長男閏哉君が予定より3カ月早く生まれ、新生児集中治療室（NICU）が不足する現状を知る。以後、同じ境遇の親子を試合観戦に招待するほか、本塁打で挙げた打点に応じて寄付するチャリティー活動を続ける。今秋には閏哉君誕生からの日々をつづった「がんばれ!!小さき生命（いのち）たちよ」（TBSサービス）を出版した。